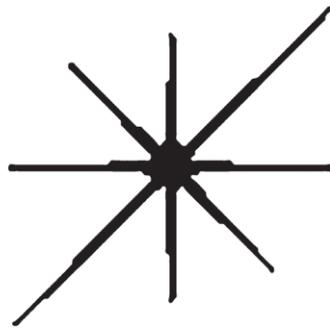


コメット通信 51

[24年10月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集 今井祝雄】

物体と光の関係

加藤瑞穂—————3

接触的映像

——今井祝雄の映像作品の時間を考える

浅沼敬子—————6

限らない世界

——今井祝雄の芸術について

大島徹也—————9

【特集 今井祝雄】

物体と光の関係

加藤瑞穂

1964年2月に今井祝雄は、大阪のヌーヌ画廊で初個展「17才の証言」を開催し、展覧会最終日に会場を訪れた具体美術協会（具体、1954-1972年）のリーダー・吉原治良から、個展出品作のうち「白い作品」を具体美術展に出品するよう勧められたという。今井は当時からすでに、布の下に身近な事物を入れて表面を膨らませ、全体を白に塗布した作品を手掛けており、「第14回具体美術展」には、支持体が正三角形の「白い作品」を1点出品した。これ以後グループ解散に至るまで、具体主催のすべての展覧会で様々な「白い作品」を発表している。

例えば、直角や平行を避けた多角形の支持体に、スピーカーユニットなどを利用して中央に穴がある凸部を数個作った作品や、内部にモーターを仕込み、そこに取り付けられた棒が白い矩形のゴム面を押し上げて規則的に隆起を生む作品、あるいは不定形の白板を複数設置した暗室壁面に、数個の穴を開けた35ミリスライドを投影し、スライドが5秒毎に自動で入れ替わって光の位置を変える作品など、その手法は多岐にわたるが、いずれの場合にも次の点が共通する。すなわち、白い表面にイメージを描く代わりに、物体と光の組み合わせでイメージを現出させる点である。表面に作られた凹凸により、そのイメージは光の当て方で如何様にも変化するし、そこに電気で動きを加えれば、変容の度合いはさらに大きくなる。また、光は陰影を生んで物体そのものだけでなく、それを取り巻く空間の広がりや、両者の関わり具合にも目を向けるよう鑑賞者を誘う。つまり具体時代の今井は、物体と光の関係を次第にテーマとして扱うようになり、それを深化させていったと考えられる。

これらの作品が発表されたのは、ちょうど具体が1965年7月の「第15回具体美術展」を境に、グループの主流をなす作品のあり方を変化させた時期とほぼ重なっている。この転換は、当時の海外の美術動向に呼応して吉原が主導したと目される。同年4月に吉原は、アムステルダム市立美術館の「ヌル1965」展に出品するため息子の通雄を伴って渡欧した。オランダで1961年に結成されたグループ・ヌルは、ドイツのゼロや日本の具体など、物質をイメージの単なる媒体とせず、それ自体の特性を生かすなど新しい物質観を表明していた作家たちに展覧会への参加を広く呼びかけた。本展への出品で吉原は、いわゆるアンフォルメルがもはや欧米では先鋭と見なされず評価されていない事態を、身を以て学んだのである。その後まもなく開かれた「第15回具体美術展」では、吉原を筆頭に、具体初期からの会員たちの作品に明らかな変化が見られ、それまでの奔放な筆致や重厚なマチエールが抑制的になり、明快な形態や画面構成が目立つようになった。

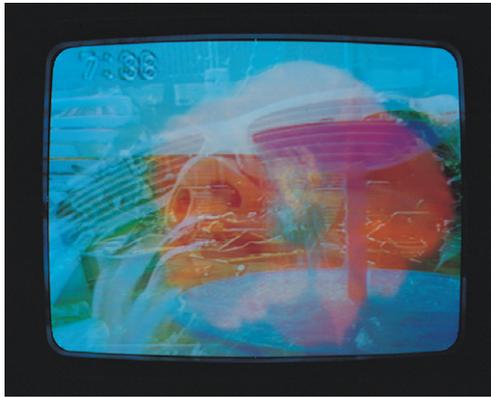
今井の作品はそうしたグループとしての新しい方向性に合致したのであり、その傾向は同時期に具体に加わった他の作家たち、今中クミ子、高崎元尚、松田豊、ヨシダミノラにもおおよそ共通する。ただし留意したいのは、今井が上記で述べた「光」を扱う姿勢において彼らと一線を画した点である。高崎も画面に貼付する方形のキャンバスの反り具合で陰影を生んだが、そのイメージの移り変わりを作品化することはなかった。それに対して今井は、変化する状況と空間の有り様に着目し、その中で光を、物体を照らし出す手段ではなく、物体との動的な関係を築く主要素として扱った。また電気の導入に関しては、ちょうどキネティック・アートが欧米で目立った時期で、松田やヨシダも取り組んでいたが、彼らの作品で光は、作品の動きとイメージのあり方に本質的に関わるものではなかった。

しかし今井の場合は、光こそが最終的に浮かび上がるイメージを成立させる要として不可欠になっている。

こうした物体と光との関係の追求が、やがて写真や映像の制作へと展開していったのは、それらの特性を考えれば極めて自然だったと思われる。なぜなら、物体と光の関係は一時も静止しないが故に、何らかのかたちでイメージを留めておくメディアが必要になった上、そもそも写真・映像は、原理的に光の作用に基づくメディアだったからである。もっとも今井がそれらを制作するとき、フィルムやテープといった素材の物質感を消去せず、それを展示する現実の空間や時間との関わりを念頭に置いていたのは特筆すべきであろう。写真や映像を見るという行為が、イメージの解釈にとどまらず、実際にそれに向き合う人が身体で感じ取る物体としての作品および周囲の空間、イメージの中の時間と現実を経過する時間をも看取る体験であることを、今井の作品は如実に教えてくれる。そしてそれは、実は具体がその活動初期に野外や舞台での発表で明らかにした、物質との向き合い方や、環境の捉え方に通底しており、その点で今井はやはり具体の精神を共有しているのである。

執筆者について——

加藤瑞穂（かとうみずほ） 芦屋市立美術博物館学芸員を経て、現在、大阪大学総合学術博物館招聘准教授。専攻＝近現代美術史。主な著書には、『田中敦子と具体美術協会——金山明および吉原治良との関係から読み解く』（大阪大学出版会、2023年）がある。



《タイムコレクション》

1981

【特集 今井祝雄】

接触的映像

——今井祝雄の映像作品の時間を考える

浅沼敬子

1960年代後半から1970年代初頭の関西では、何人もの美術家が写真や映像を用いた作品の制作に向かった。同時期、突起のある白の立体作品を動かして写真イメージを投影し⁽¹⁾、フィルムやカメラを用いた作品に移行していった今井祝雄は、この動向を代表する美術家といってよいだろう。彼らが映像表現に向かった理由、背景はいくつも挙げられるのだが、ここでは坂上しのぶの「70年代映像史」に紹介されている『オール関西』1969年2月号の記事に目を向けてみたい⁽²⁾。同記事で、乾由明の談をまとめるかたちで報じられたのは、1968年に月を周回したアメリカの宇宙船アポロ8号から送信され、テレビで放映された月面映像の臨場感だった。テレビを見た人々は、宇宙から同時に送られる映像、「イメージ」を「現実」として経験した——そこでは宇宙飛行士が肉眼で見た月面こそ「影」だと同記事はいう。

月面の映像体験が関西の美術家に具体的にどのような影響を与えたのか、坂上のウェブサイトで詳述されるわけではない。想起されるのは、1960年代末から京都の「現代の造形」展等で作品を発表しはじめた野村仁が、1970年代に月や太陽を主題とした作品の制作に向かったことだろうか。1969年の《Tardiology》で、段ボールが崩れていく過程の記録によって地球重力への関心を示した野村は、1975年には月を音符に見立てた「moon score」の写真シリーズをはじめ。その後野村の関心は大地（地中）と宇宙へと分裂的に、あるいは統合的に向かっていくように見えるが、今井の場合、宇宙にせよ地中にせよ、観念的にしかとらえられない遠い存在に関心を向けることはなかった。今井が1974年にはじめた、ポスターや新聞雑誌の海の写真をコラージュした「水平線」シリーズは示唆的だ。同シリーズでは、異なった場所で撮影された海景写真がつなぎ合わされることで、地球の一体性が示唆される。とりわけ円状に貼り合わされた海景は、今井による他の円形作品だけでなく、宇宙から見た丸い地球のイメージを想起させる。同時に、空（宙）や海（地）ではなく、両者の接面である水平線が強調されるのは今井らしい特徴だ。筆者が2019年に今井に取材した際、今井が自分自身を「地べた派」とおどけて呼んだのを覚えている。今井はそのビデオ作品《Floor》（1972年）で、人の足元の床（地面）を映し出した。同作ほど明示的ではないにせよ、さまざまな日用品の上に布を被せて異質な形態を浮かび上がらせた1960年代の半立体作品から、パンチで穴を開けながらフィルムを映写していった《円》（1967年）、草むらに置いたガラス面の変化を撮影した《SQUARE—glass / grass》（1970年）、自分自身歩行中に会った曲がり角や信号機を前にカメラのシャッターを切った《ウォーキング・イベント／曲がり角の風景》、《時間の風景／阿倍野筋》（いずれも1977年）等、今井の作品は映像に限らず常に接触をともなう。「地べた」は、文字通り地上を歩いたり、地面に何かが置かれたりするだけでなく、広く接触を表す言葉とも解せる。

野村にせよ今井にせよ、時間がその作品の大きな主題となっていることは明らかだ。野村の場合、時間は人間的次元を大きく超えて、宇宙的、地層的概念といえる。たとえば《ジュラ紀の巨木：豊中》（1998-2000年）で、野村は、豊中市で発見された木の化石に想を得て、化石の属すジュラ紀から現在までの時間を、架空の年輪と同市の地図で表した。今井の作品にも、個々の人間の次元を超越した時間の存在は示唆される。自然光の反射を利用した1972年の《15時の光》は、天候や太陽の動

きを今井がうまくとらえた作例であり、《ビデオスナップ》(1974年)などテレビ受像機を使った多くの作品で、テレビの放映が個人的次元にないことはいまでもない。そして太陽光にせよテレビ放映にせよ、本来は一時的なもので、空間的痕跡はほとんど残さない。しかし今井がその映像作品の多くで行ってきたのは、超個的ともいえる時間的次元に自己の身体やカメラ、ビデオ機器などで介入し、物質的・空間的痕跡を残すことであった。あるときはビデオテープとして丸められ、あるときはポラロイドカメラの感光紙上に像として時間をともなって現れ、身体や壁面、受像機などに貼り付けられる。しばしばパフォーマンスとも連動する今井の映像作品では、異種の時間(空間)経験がときに重なり合いながら展開していく。

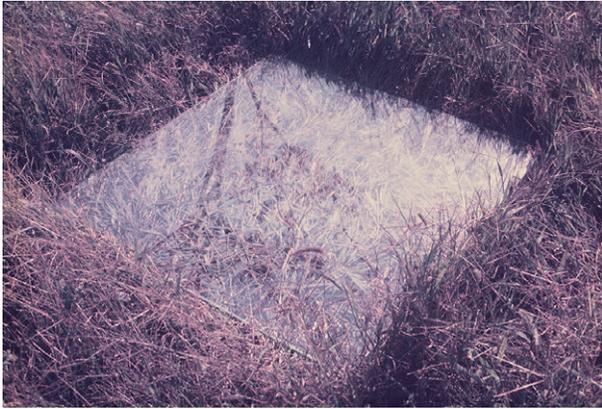
今井が、人類の宇宙進出に強い関心を抱いたとは筆者は思っていない。しかし、1969年にはアポロ11号が月面着陸に成功し、地上の人々は疑似的に月面に降り立つ映像体験も味わった。こうした時代に、あえて映像の物質的、身体的、接触的側面にこだわった今井の作品には、既出の記事で強調された、「イメージ」としての映像にあらがおうとする意思が感じられるのである。

【注】

- * 本稿作成にあたって、今井祝雄『タイムコレクション』(水声社、2015年)を参照した。
- (1) 1966年、東京・銀座の松屋デパートで開催された「空間から環境へ」展で、今井祝雄の白の動く表面《白のイベント》に投影された写真を提供したのは大辻清司、東松照明、奈良原一高だった。
- (2) 坂上しのぶウェブサイト「70年代映像史」参照。<https://shinobusakagami.com/images-history/70年代映像史/1390/> (2024年10月21日閲覧。)

執筆者について――

浅沼敬子(あさぬまけいこ) 1975年生まれ。現在、北海道大学大学院文学研究院教授。専攻＝現代美術。小社刊行の編著書に『ミヤギフトシ――物語を紡ぐ』(2023年)がある。



《SQUARE—glass / grass》
1970

【特集 今井祝雄】

限らない世界

——今井祝雄の芸術について

大島徹也

芦屋市立美術博物館の「今井祝雄——長い未来をひきつれて」展（2024年9月14日—11月17日）に行ってきた。今井の作品をこれほど多く一度に年代順（正確には、逆年代順）に観たのは初めてで、彼の芸術を見つめ直すとても良い機会となった。以下では、同展を見て私が特に考えた2, 3のことを書き留めていこう。

今井祝雄と言えば、1965年、高校卒業後すぐに最年少で具体美術協会（1954-72年）の会員になった美術家だが、具体との彼の出会いは、1962年、彼が高校1年生の時にさかのぼる。その年今井は、『女性専科』という15分のテレビ番組が「限らない世界」というテーマで具体の仕事を連日特集していたのを見たのだった。今井によれば、その放送は次のようなものであった。「内容は既成の枠を超えた絵画を紹介するシリーズで、絵といっても『形があるとは限らない』、『絵具で描くとは限らない』、『筆で描くとは限らない』、『平らであるとは限らない』、『色があるとは限らない』と日替わりで続き、『筆で描くとは——』の回では白髪一雄が足で描く制作の様子とインタビューといった具合にそれぞれのメンバーが日替わりで出演していた」⁽¹⁾。

ここで今井の仕事を見てみれば、それらの「……とは限らない」という問題はすべて、具体期およびその後の彼自身にも通じるものであることが分かる。「限らない世界」とは誰が考えたテーマか知らないが、秀逸な表現で、そこには「誰もやっていないことをやれ！」という、具体のリーダー・吉原治良の教えが響いている。

今井は自分のことを、「始めからもっとも〈具体〉的でない作家といえるかもしれない」⁽²⁾と言っているが、「誰もやっていないことをやれ！」というのが具体の核心的な精神であったとすれば、今井の場合、後期具体に所属しながら非常に〈具体〉的でない仕事をしていたということが、実は最も本質的に〈具体〉的であったとも言えるかもしれない。いずれにせよ具体との出会いは、今井にとって決定的なインパクトを与え、それは現在に至るまで、彼の中に強く残存していると思われる。

具体後の仕事については、今井は、「行為」の「副産物」としての「作品」ということをしばしば言っている。今井は、たとえば《時間の衣裳》（1978年）という自作に関して、次のように述べている。「ぼくを含め、このように、いわゆる作品を造りあげてを至上だとはもう考えない非造形作家にあっては、作品というより、一つの行為（＝生活、思想）から生まれる諸々の副産物と呼んだほうがいいかも知れない」⁽³⁾。こういった問題は、コンセプチュアル・アートの文脈で考察することもできるだろうが（今井自身、自分の仕事について、「コンセプチュアル」という言葉を使ってもいる⁽⁴⁾）、具体の初期における白髪一雄や嶋本昭三、村上三郎らによる「行為」の重視とも深く関係しているように思われる。たとえば白髪は、1973年に次のように述べている。「何でもいいからからだを使うてなにかやるのが、非常に意義があるような気がしていたわけですね。絵を描いて定着して、それが残るといふことよりも、そんなもの残らなくてもかまへん、いうぐらいに思っていたわけですね。[……]長く後世に残るのやったら、それにこしたことはないけど、それよりも、自分がなにかアクションをやることによって、それこそなにか得られるいうたらおかしいけど、なにかそんなようなもののほうが大事だというふうなことで、そういうふう考えたのですけど」⁽⁵⁾。このように、白髪の場合、彼

がアクション・ペインティングを始めた頃は、「行為」の結果を「作品」として残すという考えは彼の中で希薄だったため、その時期の彼のアクション・ペインティングは、実際ほとんど現存していない。他方で、その後白髪は「作品」というもの／こととの向き合い方に変更を加え、自らのアクションをペインティングとしてきちんと残すようになるし、また、今井の「行為」については、それはそもそもニュアンスとして「アクション」というよりは「イベント」的なものだったり、細かな違いはもちろんいろいろあるのだが、己の関心事を、完成形にとらわれることなくとにかく「行為」に移してやっていくという今井の態度と実践は、彼が具体の偉大な先輩たちから学んだ重要なことの一つではないだろうか。

具体後、今井の主たるメディウムは、写真やビデオになっていった。そこにおいて彼が特に目を向けているのが、「時間」という要素である。流れる時間の中で移り変わってゆく物事の一瞬一瞬を、静止したイメージで捉え、写し出す写真（インスタントカメラを用いれば、撮影後数秒の間を置いて、そのイメージをその場ですぐに得ることも可能である）。そして、時間の流れをそのままに記録したり映し出していくビデオ。それらを用いた（あるいは、併用した）今井の仕事では、「ずれ／ずらしの美学」とでも呼べるような関心と実践がとてもおもしろい。今井は、何らかの差異を含んだ写真イメージやビデオ映像をオーバーラップさせたり置換したり入れ子構造にすることによって、現実の時間の流れの中で、事象を複雑に連続ないし断続させたり、重層化してゆく。そうして今井は、日常における我々の漫然とした認識を覚醒させたり、我々の固定化された認知機能に揺さぶりをかけてくるのだ。

最後に、今回の芦屋市立美術館の「今井祝雄——長い未来をひきつれて」展で展示されている今井の最新作について言及しておきたい。ロビーに展示されている巨大な《瀑布——ビデオの時代》（2024年）がそれで、かつて一般家庭でも広く使われていたVHSビデオカセットテープを素材とした作品だ。誰かが録画し、しかしその映像を観ることは現在では機器的に困難となり、もはや不要となったVHSテープ。それらを今井が大量に入手し、カセットを解体、リールに巻かれているテープを会場の2階から1階のロビーに何十本、何百本と流し落として、壮観な「時間の帯」——今井はビデオテープのことを、こう呼んでいる⁽⁶⁾——の滝を作り出している。1階の床の上には、さまざまな時間を記録したそれらの「時間の帯」が、絡まりながら堆積している。そこには、過去の時間の複雑な入り組みの物質的表現を見ることができよう。他方で今井は、展覧会初日に彼が行ったギャラリートークでは、使われなくなり忘れ去られたメディアを別のかたちでアートとして再生させるということを言っていた。それら何十年か前の無用となったVHSテープは、今井の手によってアート作品に生まれ変わり、かつて記録した時間を自身の中に内包しながら、新たな時間を生き始めている。

【注】

- (1) 今井祝雄『余白とフレーム——私の美術ノート』水声社、2022年、14頁。
- (2) 今井『余白とフレーム』20頁。
- (3) 今井祝雄『タイムコレクション』大日方欣一構成・テキスト、水声社、2015年、66頁に引用。
- (4) 「〈具体〉解散後、私はコンセプチュアル（概念的）な非物質的作品に傾き、その方法として、写真・ビデオなどの映像を積極的に使い出したのである」。今井祝雄『白からはじまる——私の美術ノート』ブレンセンター、2001年、140頁。

(5) 白髪一雄・針生一郎「上方あくしょんだんぎ」『白髪一雄展——十二年間の作品から』東京画廊, 1973年, 頁付なし。

(6) 今井『白からはじまる』87頁。

執筆者について——

大島徹也（おおしまてつや） 1973年生まれ。現在，多摩美術大学教授，多摩美術大学美術館館長。専攻＝西洋近現代美術史。小社刊行の著書には，『[今，絵画について考える](#)』（共著，2023年）がある。

【今井祝雄の本】

今井祝雄

——長い未来をひきつれて

芦屋市立美術博物館編 「具体」期の活動から、ものと人間の関係への問い、映像・写真というメディアへの取り組みなど、今井祝雄の60年にわたる多彩な活動を紹介します。その活動の軌跡を明らかにする。勝俣涼、高嶋慈による書き下ろしの批評、今井祝雄と藤本由紀夫の対談を収録。今井の活動を辿りつつ、作品の今日的な意義を問い直し、現在の活動にも迫る、同名の展覧会の公式図録。

【2024年11月15日発売予定】

【展覧会情報】

《今井祝雄——長い未来をひきつれて》

2024年9月14日（土）—11月17日（日）

於：芦屋市立美術博物館

タイムコレクション

今井祝雄（大日方欣一構成・テキスト執筆） 今井祝雄は、1970年代初めから80年代にかけて、さまざまな映像メディアを駆使し、「時間」という不可視な存在をとらえる一連の実験に挑み続けた。時間を分節し、積み重ねる作品や、ポラロイドの即時性、ビデオの同時性を活用したパフォーマンスをとおして「映像」と「時間」をめぐる探求の軌跡を“いま”再考する。 3200円＋税

余白とフレーム

——私の美術ノート

今井祝雄 「具体」から半世紀の軌跡。「空間」と「時間」を自在に往還し、造形、写真、ビデオ、サウンドと多岐にわたる作品を制作し続ける美術家が、インタビューに答え、図録、ウェブサイトを書きとめた美術ノートを集成する。 3500円＋税

水声社の新刊

(2024 / 10 / 31)

【11月の新刊（予定）】

歌、燃えあがる炎のために

《フィクションの楽しみ》

ファン・ガブリエル・バスケス 久野量一訳

【11.4 発売】

▶こぼれ落ちた記憶に息吹をあたえ、物語を歌いあげる九つの短篇——忘却された真実を捉える写真、愛憎極まった読者からの手紙、匿名の暴力に晒される失踪劇、理由なき殺人を生き延びた男の撮る映画、伝説的ヴォーカリストの最後の録音、自由を求めて生きた女性の評伝……。

46 判上製 / 272 頁 / 3000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0833-5



ピランデッロ戯曲集 III

——どうしてそうなったのか分からない／山の巨人たち

斎藤泰弘編訳

【11.4 発売】

▶無意識に犯した罪におののき、自罰の欲求から破滅の道へと進む心理劇『どうしてそうなったのか分からない』、落ちおれた劇団《伯爵夫人一座》の受難を描き、ファシスト政権の芸術蔑視を風刺する未完の遺作『山の巨人たち』の2作品を収録。20世紀最大の劇作家の戯曲集、全3巻完結！

A5 判上製 / 296 頁 / 4000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0830-4



ブリュヌチエール

——ある反ドレフュス派知識人の肖像

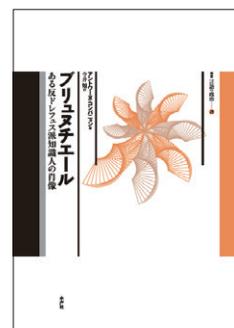
《言語の政治》

アントワヌ・コンパニオン 今井勉訳

【11.4 発売】

▶ドレフュス事件による激震のさなかにあった世紀転換期フランス。今日の文学理論の泰斗が、忘れ去られた保守派の批評家ブリュヌチエールを歴史の舞台に上げる。一人の知識人の著作や書簡をプリズムとして、危機の時代における文芸・宗教・政治の交錯を活写するマイクロ・ヒストリー。

A5 判上製 / 400 頁 / 6000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0827-4



私はなぜ自分の本を 一冊も書かなかったのか

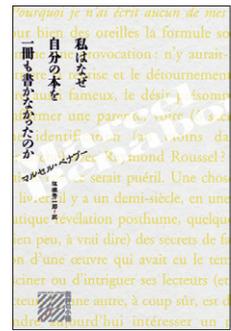
《批評の小径》

マルセル・ベナブー 塩塚秀一郎訳

【11.8 発売】

▶ペレック、カルヴィーノと並ぶ、実験文学集団「ウリポ」の旗手が放つ問題作。エッセー、思索、批評、言い訳、剽窃——そのすべてを織り交ぜながら、〈私〉の作品を書くことを繰り返す。『書くことの困難』をめぐる真面目さと滑稽さ。

46 判上製 / 200 頁 / 2500 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0783-3



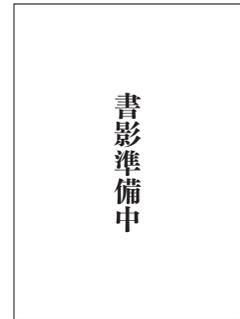
今井祝雄——長い未来をひきつれて

芦屋市立美術館編

【11.15 発売】

▶最年少会員として参加した「具体」での活動から、ものと人間の関係への問い、映像・写真というメディアへの取り組みなど、今井祝雄の60年にわたる多彩な活動を紹介し、その活動の軌跡を明らかにする、芦屋での展覧会の公式図録。

A5 判並製 / 120 頁 + 別丁カラー 24 頁 / 3000 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0832-8



マルグリット・ド・ヴァロワ

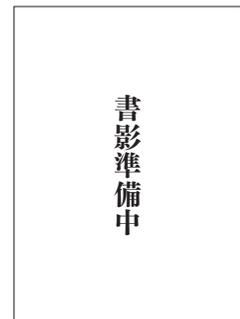
——一人の女性の物語、一つの神話の歴史

エリアーヌ・ヴィエノ 鍛冶義弘訳

【11.27 発売】

▶兄弟との恋愛関係、退廃した生活、政敵の暗殺……悪女〈マルゴ〉のイメージをヴァロワ朝最後の王妃から払拭する、最新の研究成果。王妃の回想録、書簡、後世の歴史家たちの著作を精査し、〈マルゴ伝説〉誕生の経緯と神話の裏に隠された彼女の実像を明らかにする。

A5 判上製 / 446 頁 / 6000 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0818-2



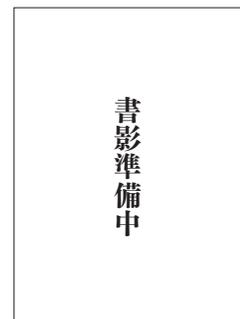
君自身のアートへ

小林康夫

【11.30 発売】

▶苛烈なカタストロフィーの時代のただ中であって、今、〈アーティスト〉であることに何の意味があるのか？ 半世紀にわたってアートと並走した哲学者が贈る、過激な挑発！

46 判並製 / 172 頁 / 1800 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0835-9



【10月の新刊（既刊）】

調査的感性術——真実の政治における紛争とコモンズ

マシュー・フラ＋エヤル・ヴァイツマン 中井悠訳 【10.11 発売】

▶《エステティクス》の拡張へ——壁に残る爆弾の破片、葉叢に残る戦車の跡、iPhoneで撮影された無数の動画、衛星写真、あらゆる存在物の《感性術》を經由しながら、事件の真実と暴力を隠蔽する政治を調査せよ！

46判上製／281頁／3000円＋税 ISBN：978-4-8010-0765-9



超越への回路——戦間期日本における科学と文芸

加藤夢三 【10.15 発売】

▶戦間期の時代思潮が熱狂した科学／技術は、いかなるロジックを文学に与えたのか。新感覚派、中河與一、海野十三、戸坂潤、そして「日本科学」と横光利一——知識人たちが科学／技術と切り結んだ言説編成を解きほぐし、合理的な思索が非合理的な観念へと転化する理路を導出する。

46判上製／313頁／3200円＋税 ISBN：978-4-8010-0828-1



墓の此方からの回想——芳水昭和年代記

沖田吉穂 【10.28 発売】

▶戦後のオートバイ屋は、飛行機乗りの成れの果て？ ラバウル小唄からトンコ節へ、大衆歌謡とエンジン音が響く、昭和百年の家族史、産業叙事詩！ 四国のハイデルベルクからシャトーブリアンの「死活」を考える、フランス文学者の仮構のふるさと探求。

46判上製／205頁／2500円＋税 ISBN：978-4-8010-0823-6



温泉文学史序説

——夏目漱石、川端康成、宮沢賢治、モーパッサン

《水声文庫》

岡村民夫

【10.31 発売】

▶日本各地の名湯に親しんだ文豪たちが、滾々と湧き出る創作意欲から執筆した〈本格温泉小説〉を紹介。開祖・夏目漱石、中興の祖・川端康成、特異点・宮沢賢治といった温泉文学史上の名だたる作品を読みほどこき、その「湯脈」を拓く。

46 判上製 / 280 頁 / 2800 円+税 ISBN : 978-4-8010-0829-8



女三代の「遺言」——あるファミリーにつらなる物語

武田尚子

【10.31 発売】

▶若狭武田氏の末裔として、熊本は茶道肥後古流の家元の家に生まれた祖母と母。強固な家制度の時代から、戦後、現代へ……時代を超えて、女たちはいかに生きたのか。ファッション・ライターとして長年活動してきた著者が綴る、名もなき女性たちの生と一族の歴史を辿るドキュメンタリー・エッセイ。

46 判上製 / 232 頁 / 2000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0825-0



水声社

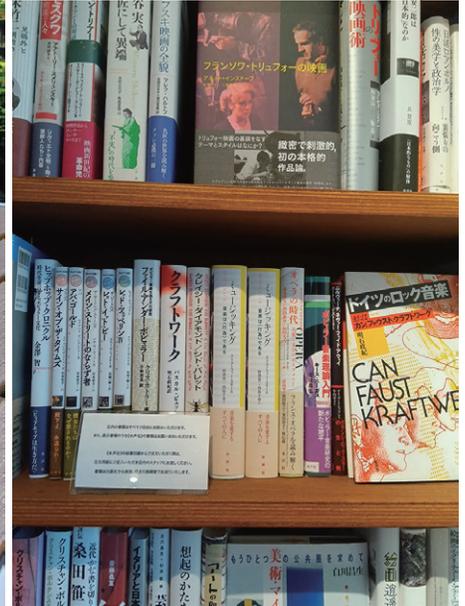
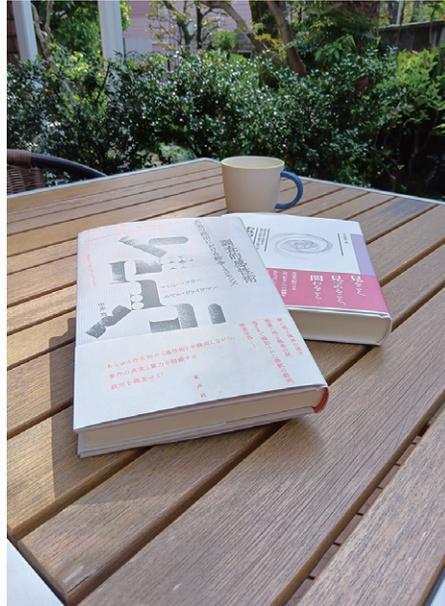
東京都文京区小石川 2-7-5 tel. 03-3818-6040 / fax. 03-3818-2437 eigyo-bu@suisaisha.net

ブックカフェ



本の庭
Le Jardin des livres

本の庭



移ろいゆく季節を感じながら、緑と本に囲まれて、憩いのひとときをお過ごしいただけるように、都内でもまだ緑の多く残る山王にブックカフェを開き11月15日で一周年を迎えます。店内には水声社の本を展示販売しており、新刊は本屋さんの店頭に並ぶより、10日から1週間ほど早く入荷します。「できる限り手作りの物を」をモットーに、パニーニやスコーンなど、店内の本をご自由にお読みいただきながら召しあがれる軽食を。また、焼菓子や各種スイーツは、窓辺の景色とともに季節を感じていただけるように、シーズンごとに展開しています。

Instagram もご覧ください。

【カフェの情報】

住所：東京都大田区山王1-22-16

アクセス：JR 京浜東北線大森駅 山王北口より徒歩7分

営業時間：11:00～18:00

営業日：木・金・土・日（詳しくはInstagramをご確認ください。11月14日（木）は休業いたします）

TEL：070-4171-0860

店内設備：スロープを設置できますので、車椅子のままご来店いただけます

Free Wi-Fi



本の庭
Le Jardin des livres

(広告)